

武蔵野日曜集会

神の義

——ロマ書第1章8～17節——

1978年1月22日(武蔵野)

小池辰雄

聖霊のバプテスマ 聖霊の賜物 福音を宣べ伝えざるを得ない 教育者自身の魂の改造 福音は神の力 生命を与える力 神の義は与えられる義 本願が成ってください 南無キリスト！ 本願成就 天来の力を与えるため 南無より南無へ エン・クリスト キリストに南無して行くだけ 十字架という徹底的な恩寵 本願帰入一如

【ロマ1:8～17】

8 汝らの信仰、全世界に言い伝えられたれば、我まず汝ら一同の為にイエス・キリストによりて我が神に感謝す。9 その御子の福音に於て我が霊をもて事うる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、10 如何にしてか御意に適い、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀がうことを我がために証し給うなり。11 われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん為に霊の賜物を分け与えんとてなり。12 即ち我なんじらの中にありて互いの信仰により相共に慰められん為なり。13 兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく汝らの中よりも実を得んとてしばしば汝らに往かんとしたれど、今に至りてなお妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。14 我はギリシヤ人にも夷人にも^{かしこ}智き者にも愚かなる者にも負債あり。15 この故に我はロマに在る汝らにも福音を宣伝えんことを頻りに願うなり。16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力たればなり。17 神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

●聖霊のバプテスマ

パウロの福音の根本のところですね。単刀直入にぶつけているようなところです。ローマ書というのは大変な書簡です。

8 汝らの信仰、全世界に言い伝えられたれば、我まず汝ら一同の為にイエス・キリストによりて我が神に感謝す。

ローマの教会の「信仰が全世界に言い伝えられた」と。ちよつとオーバーな言い方みた



いに聞こえますが。何といってもその当時の地中海の中心がローマですから。ローマ帝国ですね。その教会はパウロが建てたのではないけれども、非常にパウロはこれを評価しているわけです。

「キリストによって自分は神に感謝する」

と。もちろん、この「によつて」は「ディア」という字が使つてあるので、キリスト「を通して」神さまに感謝する。神さまに直接には言わないで、「キリストにおいて」とか、「キリストを通して」とか、よくパウロが言うわけです。パウロにとってはキリストぬきには福音はないですから。

9 その御子の福音に於て我が霊をもて事^{つか}うる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、

「私は御子の福音を伝えることをもつて、神に我が霊をもて仕える」と言う。霊的な角度から神さまに仕えていると。

人間の中心は霊である。その霊が聖霊によつて本当に生かさなければ、霊と言ってもダメでありますけれども。パウロにおいては、もちろんこの霊が完全に聖霊のバプテスマを受けたことは、第1章の「キリスト・イエスの僕」で、

「僕ということが本当に言えるためには聖霊を受けなければ言えない」

ということを申しました。しかも、彼は自分で受けようとしたのではない。キリストにひっくり返されて、そして聖霊のバプテスマを受けた。造反の彼がひっくり返されて、受けさせられた。否応なしなんだ。エレミヤが「自分は神さまにねじ伏せられた」と、エレミヤ記20章で言っているように、そういう圧倒的なキリストの力によつたわけです。

10 如何にしてか御意^{みこころ}に適^{かな}い、いつか汝らに到^{いた}るべき途^{みち}を得んと、常に冀^{こいね}かうことを我がために証し給うなり。

如何に自分がお前たちに会いたいかということとは、神さまが、聖霊が、キリストが証してくださるところだと。これは使徒行伝9章のところを見ると、彼の気持ちわかります。

●聖霊の賜物

11 われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅^{かた}うせられん為^{ため}に霊の賜物^{たまもの}を分け与えんとてなり。

11節は注目を要する。

「切にお前たちに会いたいののは、お前たちのしっかりとされんがために霊の賜物を分け与えようとしてである」

と。ローマの教会の連中は、信仰はともかくまだ本ものではないということを、パウロは予感しているわけです。「カリスマ プニューマティコン」即ち「聖霊の霊的な賜物」、聖霊の働きによつて生ずるところの神的な現象、それがいろいろあるわけです。



太陽の光を受けて、この花はいろいろに現象しているでしょ。バラだの、フリージアだの、チューリップだの、みなそれぞれ、姿と形と色がいろいろ違うわけです。けれども、太陽の光という同じ一つのものを受けている。聖霊を受けると、その人によっていろいろな現象の面が違います——現象を追い求めているわけではない——聖霊を本当に受けたら、必ず何か現象するはずです。それが知的な現象もあるでしょうし、非常に力の現象もあるでしょうし。これは人間の持ち前の何かとは質が違う。それをはつきりと実によって、その生じたところのものによって、その本体、本質を知るといわけです。

「私を信ぜよ、もし私を信じられないならば、私の業を見て、私を信じなさい」

とキリストも言っただけの通り。このことは、パウロはローマ書15章でも言っている。

「¹³願くは希望の神、信仰より出づる

信仰にあるところの

凡ての喜^{よろこび}悦と平安とを汝らに満たしめ、聖霊の能力^{ちから}にあつて希望を豊かならしめ給はんことを。¹⁴わが兄弟よ、われは汝ら自ら善に満ち、もろもろの知識に満ちて互いに訓戒し得ることを確^{かた}く信ず。¹⁵然れど我なお汝らに憶^{おも}いださせん為に、ここかしこ少しく憚^{はば}らずして書きたる所あり、これ神の我に賜^{めぐみ}いたる恩恵^よに因^よる」(ロマ15・13～15)

「神の我に賜いたる恩恵」という内容が、この場合は「カリス」という字ですけれども、「聖霊の能力によって」とか、19節の

「¹⁹また微^{しるし}と不思議との能力^{ちから}、および聖霊の能力にて働き給いし事のほかは敢^あえて語らず」

ということが書いてあるでしょ。¹³節あたりから19節あたりまで、

「聖霊の能力、賜物、微と不思議」

ということが書いてある。これは使徒行伝でパウロは事実をもつて証しているわけです。こういうところが本当に聖霊を受けていないと、いい加減に読まれてしまう。それがいかに現実であるかということですよ。

内村先生が

「信仰は理論ではない。実験である」

なんて言われた。「実験」という言葉をよく先生は言われた。先生の「実験」という言葉は、今使われているような意味ではなくて、実際にそこで現れ証しされる非常に実証的なものである。観念的なものではなくて実証的なものだという、そういう内容を「実験」という言葉で言っている。

内村先生はそう言いながら、パウロと同質的な聖霊の賜物のことは、先生は少しズレていたものだから、余りご存知ないようだ。そこらに無教会の限界がある。何と言っても、その点では——内村鑑三、藤井武、塚本虎二というのは一流の福音の伝道者また証しの人た



ちでありましたけれども——どう考えても、使徒的信仰からは次元的にはズレていた。それで、私が憎まれながらやつているわけです。

本当に神の力を受けているかということは、もう聖霊が来ているか来てないかではつきり分かる。そうすれば、必ず何か賜物がそこに、その人その人らしい賜物が出てくる。

●福音を宣べ伝えざるを得ない

それで、本当に「汝らの堅^かうせられん為に」と。ただ言葉の福音じゃない。

「福音は言葉に非ず、能力にある」

ということをコリント書で言っているとおります。我々がなにか能力を持つのではない。キリストの能力が働くんです。キリスト自身が仰っている。

「私は何もできない」

と。何もできないと言っているキリストが最大級のことをした。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。「無即無限無量」と。

¹²即ち我なんじらの中にありて互いの信仰により相共に慰められん為なり。

パウロは謙虚ですから、「お前たちにもいいものがあるだろう」と言つて互いに慰められたい。パウロもいろんな苦難に遭つていますから。しかし、「慰め」と言いましても、人間的な慰めではどうにもならない、いわゆる同情くらいのことでは。キリストの愛がその中に流れるような意味の慰めであります。

¹³兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく汝らの中よりも実を得んとて

しばしば汝らに往かんとしたれど、今に至りてなお妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。

なかなかローマまで行けなかった。エルサレムまで行つて、とうとう捕まつてしまつて、それからローマに行くようなわけです。あの頃は大変ですよ、ローマへ行こうなんて言つたつて。旅そのものが歩いていくわけですから。日本だつて、昔はみな歩いたわけですね。「汝らの中よりも実を得んとて」の「実」というのは「カリスマ」、霊の賜物のことです。

¹⁴我はギリシヤ人にも夷人にも^{えびす}智き者にも愚かなる者にも^{かしこ}負債あり。

いわゆる知的な人たち、この「ギリシヤ人」という言い方はローマの人たちも全部入るような言い方です。ギリシヤの文化を受けている人たちです。ローマはギリシヤをやつつけたけれども、精神的にはギリシヤ文化に負けているわけです。なにしろ、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなんていうのを出したギリシヤですから。「夷人」とは未開の人たちのことです。

知識階級にも、またいわゆる一般の庶民にも福音を伝えるべき負債をもっている。「負債あり」というのは「義務がある」ということ。「義務」という言葉は哲学的な、道徳的な意味では固いですが、神さまから負わされているところの義務というのは、天的



な必然、のつぴきならないところの、やむにやまれないところの事態です。それがパウロがここで言うところの「負債」です。

我々は福音を宣べ伝えざるを得ない。この「ざるを得ない」というのは上から来ているところの義務なんです。「義務、負債あり」ということは天的必然の中にあるということです。

●教育者自身の魂の改造

今の日本の教育界も、一番根本のところを先生方が持っていない。だから、私が時々言うように、全国校長会議でも叫ばざるを得ない。公立では、

「宗教のことは教育の上では直接に言っではないかん」

なんて文部省が言う。そうすると、全然、宗教は抜きになってしまっている。それではダメです。

「教える人は心の中に宗教の世界を持たなければ、本当の教育はできない」

と私は言っただけで、文部省の役人がいる前で。学校の制度でも何でもなし。もちろん、今の学校の制度はよくない。入学試験ばかりあってね。これは大いに改革しなければならないけれども。一番大事なことは、教育者自身の魂の改造です。

だから、パウロがどういう人に対しても負債があると言う。この福音の世界は、相手が知識があるうがなかるうが、そんなことは問題じゃない。しかも、パウロは非常にエリート的な人間だから言っているわけじゃない。彼は正直、エリート的な人間だけれども、そんなことは全然、問題にしてない。そんなものは「塵芥に思う」と言っている。コリント前書1章26節から、

「26兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる^{かしこ}智き者おおからず、能力ある^{ちから}

者おおからず、貴きもの多からず。27されど神は智き者を辱しめんとて世の^{はずか}

愚かなる者を選び、強き者を辱めんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんと

て世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無き者を選び給えり。」(コリント

前1・26、28)

とある。そういうのが福音の使者になる。ということ是要するに、生来賜っているところのものは、有っても無くても、もはや問題にならないということです。

神の愚かは人の^{かしこ}智きよりも上だ。福音の愚かさはこの世の哲学よりも上だと。これは本当に御霊を受けると、そのことが皆さんは本当に言える。そうしたら、非常に創造的な人間になってくる。これはしようがないです、本当だから。

だから、どういう人に対しても、自分は伝えざるを得ない。相手がいわゆる知識がなければ、そういうように語ることができるし、知識があれば、知識があるように語ることができる。どのようなにでも自由自在だと。



●福音は神の力

今日は16節、17節が主題なわけです。ロマ書1章11節と16節、17節が大事です。

¹⁶ 我は福音を恥とせず、

逆に言う、「福音のためにはいくらでも恥を負う」ということ。塵芥となる。

この福音はユダヤ人を始め

旧約の連中です。福音の隠れた土台になっていた。しかし、その土台はひっくり返された。神の選民ユダヤ人を始め、

ギリシヤ人にも、

この世の一番優れたギリシヤ人にも。

^{すべ} 凡て信する者に救を得さする神の力たればなり。

「福音は神の力だ」

と言うんですよ。間違えては困る。福音がいかに力あるものであるかということを、ナポレオンがセントヘレナに流されて、最後にそのことに気がついたということを、私は著作集第五巻の『百世の師ヒルティ』（1977年刊）に彼の言葉を引用して書きました。彼はびっくりしたんだ、

「聖書は文字ではなかった、生きものだった」

とナポレオンは言いました。さすがにナポレオンです。

福音がなぜ力であるか。喜びの音信^{おとずれ}とは、キリスト自身が福音^{福音体}だ。福音体なるキリストを忘れて、「福音」なんて言ったってダメですよ。「福音とは幸いのおとずれか。何が幸せか？」なんて。そんな考え方をするから、いつまでたってもダメです。

福音の主体は何かというと、福音の主体はこのキリストなんです。ルターが「キリストについて語られた福音」という気持ちで言ったならば、私は否と言いたい。福音は「キリストによつて語られた」ところのよき音信です。キリストが主体です。「について」という面もあるでしょうけれども、大事なのはキリスト「によつて」ということです。キリストが主体なんだから。キリストが主体で、キリストが語っていること、キリストがしていること——キリストの言、キリストの行——これが福音なんです。キリスト「について」使徒たちが語ったことが福音ではない。「について」語ったってダメなんです。

今度は、そのキリストを受けとつて、そのキリストの中から、福音の中から語る。「の中から」語るの、それは福音なんです。それは告白です。「中から」語っているなら、それは福音なんだ。ところが、福音に「について」語っている牧師さんがたくさんいるわけだ。また、福音に「について」研究している神学者がたくさんいるわけだ。ダメだよ、それでははいないけれども、それでは角度が違う。キリストの中から言わざるを得ない、告白せざるを得ないという語り方が、本当に福音を語っていることとなる。伝道というのは、その角度でなければ本ものでない。



「我は福音を恥とせず、福音は神の力だ」と言うのは、

「私が福音を語っているときに、それはもう福音自体が力であるから、力が溢れてしょうがない」

と。パウロはそういうわけです。福音は神の力であると言う。

●生命を与える力

それから、ルター自身がこう言っている。

「神の力というのは、それによって神さまがその本質上、自分自身において力強いということを、この神の力という言葉において理解すべきでない。そうではなくて、神の力によって我々を力強くし、力を与えるところのものであるということを、神の力というパウロの言葉において掴まなくてはいいかん」

と。正にそのとおりです。「神の力」(デユナミス テウ)というのは、我々を力強くする、我々に力を与えるものである。そういうのが「神の力」という意味だ。ただ「神が本質上、力がある」と、ただそのことを客観的に対象として言っているのではない。「神の力」と言うときに、神の力がこっちに作用してくることを感じないような言い方で、神の力なんて言ってみたって何になるか、お伽話だと言うわけだ。この角度は極めて大事なことです。みんなうつかりしているけれども。

花は太陽の光である。光がこの中にこもって浸透して、光は与えるから、この花が咲いている。そういう見方をしなければ、本当の花を見てるのではないんだ。福音を受けとつていて、力のないようなことではもう全然お話にならない。だから、

「我は福音を恥とせず」

というが、恥どころじゃない。これはうれしくてしょうがない。これは神の力だから、神の力がやって来るから。ギリシヤ人であろうとなに人であろうと、男であろうと女であろうと、老人であろうと若い人であろうと、病人であろうと健康者であろうと、とにかく上から来るところの力である。これが福音という。何で喜びのおとずれか。それは神の力であるからだ。

生命を与える力です。力は与えられるんだから、その力は生命を与える。いや、その力の内容は生命に限らない。あらゆる力を与える。一番究極の力は愛の力です。ヒルティが

「愛は一切に勝つ」

と言う。あの愛は力ある愛ですよ。上から来ている愛は人を救うから。「愛は一切に勝つ」というのは

「愛は一切を救い上げる」

ということです。そういう神の力に満ちていたひとは、溢れていたひとは、イエス・キリ



ストであります。だから、自分の力なんか問題にしないわけです。

「私は何もありませんよ、無者ですよ」

と。無者、即ち無限無量の神の力が来ているではないですか。これがキリストです。

「我を見し者は父を見しなり」

というのはそのことです。

「凡て信ずる者」という「信ずる」という言葉がまた躓きになる。「身体で受けとる」と言ったらいい。全存在で全的に受けとる、体受する。「体」とは全存在のことですよ、肉体のことを言っているのではない。

「凡てこれを本当に受けとる者に救を得させる神の力である」

と。そうすると、福音は絶対に、ある事柄に、ある真理について語られているような内容ではない。キリスト自身が即ち福音であるから、即キリストであるから。キリストを本当に受けとる者には神の力がやってくる。そういう意味において、福音は神の力であると言う。パウロはキリストという福音体に圧倒されたから。

●神の義は与えられる義

17 神の義はその福音のうちに^{あらわ}に顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録^{しる}して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

この一節がロマ書の中で最も大事な節のひとつです。

「神の義はその福音のうちに^{あらわ}に顕れる」

という。マルチン・ルターはこの言葉に躓いたわけです。

「神の義がその福音のうちに顕れるとは何ごとか。福音は愛ではないか、義が現れたとはどういうわけか」

と。詩篇の中に時々ひらめきの言葉が出ている。詩篇71篇の2節から、

「²なんじの義をもて我をたすけ、我をまぬかれしめたまえ。なんじの耳をわれに傾けて我をすくいたまえ。

「なんじの義をもて我をたすけ」と言つて、「汝の愛をもて」とは書いてない。汝の義で助けてくれと言う。

14 されど我はたえず望みをいだきて、いやまます汝をほめたたえん。

上から来んです、この望みというのは。

15 わが口はひねもす汝の義となんじの救^{すくい}とをかたらん。われその数をしらざればなり。

「汝の義となんじの救」というのは二つのことではない。汝の義即救なんです。義と救というものが同義語に使ってある。

16 われは主エホバの大能^{みわざ}の事跡をたずさえゆかん。



「大能の事跡」とは力ある業のこと。「福音は神の力である」というロマ書1章に相應するようなところだ。

われはただなんじの義のみをかたらん。¹⁷神よなんじわれを幼少より教えたまえり。われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたえたり。

「くすしき事跡」はみんな神さまの義の現れだと言うんです。

¹⁸神よねがわくはわれ老いて頭髮しろくなるとも我がなんじの力を次代にのべつたえ、なんじの大能を世にうまれいづる凡てのものに宣べ伝うるまで我をはなれ給うなかれ。

凄いね。

……²³われ聖前にうたうときわが口唇よろこび、なんじの贖いたまえるわが靈魂おおいに喜ばん。²⁴わが舌もまた終日なんじの義をかたらん。われを害わんとするもの愧惶つればなり。」(詩篇71・2～24)

この詩篇71篇というのは、ルターさんはもつと早く気がついてくれればよかった。気がついてからルターの詩篇の註解が変わってきたんです。

旧約に既に、「義が救である、恩恵である」という言葉も出てくる。「義をもつて助けろ、救え」と。義がいかに恩恵であるかは第二イザヤに出てくる。イザヤ書51章5節、

「5 わが義はちかづきわが救はすでに出たり。

これは神さまの言葉です。

わが臂はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望み、わがかいなに依り頼まん。⁶なんじら目をあげて天を觀、また下なる地をみよ、天は烟のごとくきえ、地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救はとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。

義と救です。

⁷義をしろものよ、心のうちにわが律法をたもつ民よ、われにきけ。人のそしりをおそるるなかれ、人ののしりに憎くなかれ。⁸そはかれら衣のごとく蠱にはまれ、羊の毛のごとく蠱にはまれん。されどわが義はとこしえに存らえ、わがすくい万代におよぶべし。

そういうものはどういふ救かという、11節、

¹¹エホバに贖いすくわれしもの歌うたいつつ帰りてシオンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただきて快樂とよろこびをえん。而してかなしみと嘆息とはにげさるべし。」(イザヤ51・5～11)

これは正に福音だ。贖いの、福音のおとずれだから。義は贖う義である。義は与える義である。義は救をもたらしもの、義を与えるものである。

「力は与えられる力であり、神の義は与えられる義である」



と、そのことにルターが気がついて、宗教改革の火がそこに灯ったわけです。それまでは、神の義は審判すると思っていた。恐くてしょうがない。審かれると思っていた。こっちは罪だから。義の反対は罪だから。

「我々は罪びとだから神の義に遭ってはかなわん。どうしても私は神の前に義となり得るだろうか」

と、ルターは一生懸命にやった。とうとう、彼は独房にぶつ倒れた。どうしてもダメだと。

●本願が成ってください

ところが、

「神の義はその福音のうちに顕れ」

とパウロが言った。よろこびの音ずれのうちに、キリストに顕れたということです。神の義はキリストに現れた。「福音に現れた」とは、福音とはキリストが主体なんだから、キリストという福音体において神の義が現れたということです。

それでは、キリストというひとはどういう在り方をしたかというところ、

「あなたの聖意^{みこころ}だけです」

と言って、汝の聖意だけを肯定していた。

「私の意^{こころ}ではありません。私の思いではありません。私の願いではありません。あなたの願いが、本願が成ってください」

と。私は仏教の方の「本願」という言葉が好きだから、使っただけども。

「本願が成ってください」

というのがキリストの願い、祈りであつた。それで自分を神さまの中にぶちまけていた。

「どうなつてもいいです、あなたの本願さえ成れば」

と。「どうなつてもいい」と言つたつて、捨てばちになつていてのではない。「どうなつてもいい」と言つて、神さまの中に自分を投げ入れている。

「どうぞ、この私をお使いくださつて、ご本願が成ってください。私には何もできません。私の力なんて大したことありません」

と。

相対的な能力や力や知恵を問題にしていると、いつまでたつても本当の世界に入れない。だから、東大生なんて頭のいい者たちは入れないんだ。いろんなものに及第するかも知れないが、神さまの国には及第できない。天国の門で、

「ちよつと、待てー!」

と言われる。なにも、東大の悪口を言っているわけではない。私も東大にいたけれども。私は東大で何年教えたか。ドイツ語の時間を通して、いくら私は脱線して福音を語ったか。今ごろになつて、ちよこちよこことが付いているのがある。みんな自分をサムシング、何



者かとしているから。そして、計算しているから。ダメです。

太陽の光の前に、蛍光灯や電気やガスや蠟燭の光が何になるか。絶対的な光の前には相対的な光は問題にならない。神さまという絶対的存在の前に、自分を何ものともしなかったのがキリストだから、私は「無者」と言う。

「よく、言ってくれました」とキリスト教界の誰が私に言ってくれるか。それくらい、キリスト教界がケチくさい。本当の真理が言われたら、大いに賛成したらいいじゃないですか。いいよ、賛成しないなら、賛成しなくたって。私は孤軍でも、天に万軍があるから、どこまでも戦います。

●南無キリスト！

だから、無者即無限無量者です。

「私は何も言えない。何もできない」

「なぜ、私を善いと言うか」

と言って、自分を否定してかかっているキリストが、

「私を見た者は神さまを見たのだ」

となぜ言えたか。徹底的に自分を何ものもしないから、神さまがここに現れた。キリスト自身が「カリスマ」そのものなんだ。恵みの主体そのものだから、その言うことを為すことがケタ違いなことになってきた。いかなる哲学がキリストの言葉にかなうか。力を持っているから。だから、

「我は真理である」

と彼は言えたんです。概念的な論理ではない。私はもうたまらんよ。

「南無キリスト！」

と言って、そのキリストの中に自分を投げ入れることだけです。

「親鸞が『南無阿弥陀仏』と言ったら、小池は『南無キリスト』と言った」

と、後の歴史家が言うだろう。それだけの自信を私は持っています。

●本願成就

キリストは神さまの中に完全に入ってしまったている。

「どうぞ、あなたの御意を、本願を」

と。そうしたら、本願がキリストにおいて成就してしまった。本願成就、これが福音なんです。福音というのはその他のものではない。「福音はどういう内容ですか。第一に……、第二に……」なんて、そんな勘定するような内容ではないんです、キリストという福音は。だから、「組織神学」なんてのは、私は反対だから、今度はそれに反対する神学を書くわけだ。そういう本願成就です。地上において彼は、本願成就で天国をそこに現じていた。やが



てそういう国が必ず来るぞと。全部、その徴しるしです。キリストが地上でなさったこと、言ったことは全部、これは本当の最後の世界の徴なんです。だから、私は

「福音は本当の意味では、徴の宗教である」と言ったのではないですか。

現象と本体がピタッと即しているんです。我々は罪びとだから、即さないよ、ずれているよ。いいよ、ずれても。とにかくしかし、本体から何かが出れば、在り方はそれぞれでいいんだ。人間というのはいろいろだ。それを人間の相対的な面を見て、

「あの人はどうだ。この人はどうだ。あれはクリスチャンのくせにどうだ」なんて言っているやつは、それだけのなし。

問題は「神―キリスト―我」の一直線の問題です。それから自在に展開していく。その結果がどうなろうと、そんなことはどうでもいい。「何人悔い改めたか、何人救われたか」なんて、いいですよ、そんなことは。とにかく、本当に生きていけば、神さまはいいようになさる。

「ユダヤ人は徴しるしを求める」

というのは、ただ現象を求めるような徴はダメなんだ。しかし、その徴において本当の本体を掴つかむという意味において「徴」であるということ。キリストは最大の徴であり、最大の不思議であり、最大の奇跡である。本当は不思議も奇跡もないんだ。みんな霊的法則が働いているだけのなし。

「生命いのちの御霊みたまの法」(ロマ8:2)

が展開しているだけのなしです。

●天来の力を与えるため

「神の義」というのは即ち、神さまの聖意が即、義なんです。そして、それをもって本願が成就していく。義が成就していく。この義というのは、キリストがなぜ「義人」であるかという、その本願に本当に自分を投げ捨てていたから、その姿が義人なんです。だから、神の義がキリストにおいて現れている。

「義ただしい」とは道徳的に正しいということではない。間違わないようにしてください。その人その人によって実存的に神の義の内容はみんな違うんです。「こういうことが神の義であります」なんて、道徳的なことを言っているんじゃない。

全キリストが即ち神の義の実証いしん体であります。ということは、自分をひとつも義としなかった。己を義としなかった。ところが、己を義としてたやつらがたくさんいる。それがパリサイ人びとです。キリストの敵は、己を義として神さまをそちのけにしたようなやつら。そして、大いに神を拝んでいる、宗教的である、道徳的であると自ら認じている。連中。これはキリストの敵なんです。人間的に見ると、ちよつとみんな立派そうに見える。ダメ



だよ、そんなものは。

ところが、パウロがそれだった。それでキリストを迫害していた。

「なぜ、私を迫害するかつ！」

と、彼はやつつけられた。

「お前は己を義としているじゃないか。ダメだ。なぜ、神さまの義をもらわないのか」
と。パウロは徹底的にキリストにやつつけられたから、

「神の義は福音のうちに顕れた」

と言った。キリストという福音体において顕れた。いいですか。私はパウロの言葉をもうひとつ激しく読むんです。

ルターが「与えられた義」であることに、キリストにおいて与えられた義であることに気がついた。即ち、キリストを受けとると、こっちは惨憺たる我であるが、もうそんなものは問題じゃなかった。それが「贖い」というものです。それが即ち十字架なんです。ルターがそのことを言っている。

「人間の持ち前の生来の力なんていうものは、キリストの十字架によって完全に滅ぼされた」

と言った。そうしたら今度は、

「それは、彼の本当の天来の力を与えるためであつた。それによって我々の霊が力づけられ、また祝福され、そして聖霊におけるところのものを為す力が与えられるようになつてきた」

と。即ち、十字架と聖霊のことをここでルターも語っている。十字架でもって私たちは己の義を捨てられた。そうしたら今度は、本当に神の義を与えられて、神の義を行ずるような力が出て来た。神の義を、聖意を、本願を行ずることのできる力が与えられる。これは聖霊でなければできない。聖霊を受けなければ、聖霊の力によらなければできない。それは相対的な意味では、みんな善いことですよ。けれども、本当の質が違ふんです。

そして、ルターは

「福音は神の力であるということは、福音は聖霊の力であるということと同じだ」

と言っている。そのとおりです。さっきの16節の、福音は神の力、聖霊の力であるということ。もちろん、これは聖霊が与えられる意味においての力です。だから、もうひとつ別な言葉で言う、みんなこれは「カリスマ」(賜物)でなくて、「カリス」(恵み、恩恵)なんです。

「神の義はその福音のうちに顕れた」

ということが分かったですね。そういうわけで、キリストにおいて神の本願が成就した。これにおいて、福音において神の義は顕れた。義が楽しくならなければダメですよ、義が審きであるうちは。義が恐ろしいうちはダメなんです。ルターは、恐ろしかったんです、



ところが、後でうれしくなった。

「我々を義とする」と言う。「義とする」というのはただ観念的ではない。もともと、「義とする」というのは法律上の観念的な意味を持っていた。けれども、いわゆる法的な意味よりも、実際に義を与えることが「義とする」ということ。ところが、普通のプロテストントは「信仰によって義とされる」というのをみんな観念的にしかとっていないから、いつまでたっても、どうにもならん。

●南無より南無へ

17……信仰より出でて信仰に進ましむ。録^{しる}して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

「信仰から信仰の中へと」（エクピステオース エイスピスティン）と書いてある。これは学者がいろいろな解釈をする。そんな変てこな分析的な解釈はなにも要らない。アウグスティヌスが、

「始めの『信仰より』というのは、福音を言葉で受けとることで、『信仰へ』というのは、今度は福音を行いの方に展開していくという意味で言っている」

なんて言うが、そういう面をあるでしょうけれども、それも要らないんだ。ルターはここにアウグスティヌスのその解釈のことを書いている。

要するに、信仰から信仰へと限りなく展開していく。受けとるから、また限りなく受けとれ。受けとり方は「これでいい」なんていうものじゃない。キリストの義を死に至るまで受けとってください。そして、受けとって流れていく。義がその人を通して流れていく。絶えずまた受けとっていく。「信仰より信仰へ」というのは私に言わせると、

「南無より南無へ」

という、

「南無キリスト」

ということ。南無より、南無へ。帰入、また、帰入。祈入、また、祈入。キリストの中へ帰入する、祈り入る。どちらでもいい。これは「南無」という意味だからね。南無より南無へ、キリストの中に帰入、また、帰入。限りなく入って行く。

あなた方は空気を吸っていて、「もう、今吸ったから、後はいい」なんて誰が言いますか。吸っては吐いて、また吸うではないですか。我々の魂はいつもキリストからキリストへと、キリストを呼吸してなければ。祈入、また、祈入です。

●エン・クリスト

けれども、間違えては困る。「帰入」と言っただけでも、これはいつも離れているような気持ちではダメですよ。さつき、



「キリストは神の懷にある」

と言ったが、今度は私たちはキリストの懷の中にある。「神・キリスト・我」ということ。キリストの懷の中に入つて、そしていよいよ帰入していく。中に居ることなんです。パウロがいつも言っている

「エン・クリスト」

「キリストの中に」

です。我々は空気からどこかへ離れていますか。空気の中にあるではないですか。空気の中に在つて空気を吸っているではないですか。キリストの中に在つてキリストを吸うようなことになる。

仏教の坊さんたちはみんな如来の世界でそういうところに入っている。仏教の一流の坊さんは、いくらでもいるよ。けれども、福音の世界はそれ以上ですから、間違えないでください。福音の世界はそれ以上の素晴らしいところだから。何を讀もうと、樂に受けとれる。そして、みんな包摂してしまう。それくらいキリストというのは素晴らしいんですから、間違えないでください。私はなにもキリスト教と仏教とをごちゃまぜにしているのでも何でもありません。普通の人みたいにな、すぐ仏教を切つてみたり、どうのこうのと、そんな狭いものではない。宇宙的なキリストですから。

それが、「信仰より信仰へ」ということ。私は、

「南無より南無へと行く」

と言う。そんなことは、まだ誰も言わない。南無より南無へと入つて、信仰より信仰に進ましめる。進ませるんですから、自分で進むのではない。これは神の力だから。

「力ある神の義は、神の力たる福音のうちに現れて、私たちを力より力へと進ましめる」

と言つたつていい。詩篇84篇7節に、

「⁷かれらは力より力にすすみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ」(詩

篇84・7)

とあるように。

あなた方は日常生活で、本当にそういった力でやっていますか？

「どうも、日曜に集会に行かないと、だんだん力がなくなってきた」

なんて、懐中電灯みたいなことではダメだよ。いつもキリストという電源につながっていないければ。そして、一週間たつて来てみたら、みんなの眼の輝きがちがつて来たというのでなければ。

「またみんな、ボヤけたような顔をしているなあ。ここでもまた蓄電されて、一週間でまた少し抜けていく」

なんていうのでは情けない。まあ、あなた方はそうじゃないと思うけれども。



「祈る」というのは、事柄を祈るのではない。キリストの中に入ることです。祈禱会も結構だけれども、キリストの中に入らないような祈禱会なら止めた方がいい。私は祈禱会をしないけれども、キリストの力が来るからね。いつでもどこでもキリストの前に平伏せば、力が来るから仕方がない。行き詰まりを知らんです、正直。この世的にうまくないことが起きれば起きるほど、逆に力が来る。イスラエルの歴史は惨憺たるどん底に來たときに、偉大な預言者が現れたではないですか。皆さん、運命、環境に支配されるようなことではダメです。

「もうどうにでもなれ。私の中のこのキリストをどうしてくれるか」という人になってください。

●キリストに南無して行くだけ

神の義はキリストという福音のうちに現れました。キリストという福音のうちに現れて、私たちを南無より南無へと進ましめて、キリストの中に入れてくれる。

「義人は信仰によりて生くべし」

というのは、信仰でもってそういうように、福音を、キリストを体受する者が義人である。体受して生きる者が義人であるということですよ。間違えては困る。「そうか、『義人は信仰によりて』とあるが、私は本当に義人かどうか」なんて、そうではない。

「信仰によつて本当に生きる者が義人である」

ということだ。言葉のただ表面を見てると、こういう言葉がすぐ躓きになる。

「儀文は殺し、霊は活かす」

と言う。私はパウロにもこだわらない。ということは、勝手なことを言っているのではない。パウロの本当の精神を、パウロの言葉の奥を掴まえて告白するだけの人はなしです。

何と言ったって、キリストの他にパウロみたいなこれだけの人間は歴史の中にいません。キリストを除いては、パウロは最大です。なぜ最大になったかというと、徹底的にキリストの僕になったから。キリストの僕の他に者でもない。

「我は罪びとの首である」^{かしら}

と言って、自分を告白して、自分を投げ捨てた。そうしたら、えらいことになった。「自分の信仰」ですらない。

「信仰より出でて信仰に進ましむ」

とあるから、

「私はまだ信仰が足りないのです、パウロが言うように、もっと、信仰より出でて信仰に行きたいんです」

なんて、大体、クリスチャンというのはそう思っているんだ。バカだね。信仰をサムシנגだと思っているから。自分の信仰を何ものかと思っているから。そうじゃないですよ。「信



仰より出でて信仰に行く」とは、

「南無より出でて南無に、キリストに南無して行く」

だけのなしです。しかも、それは自分で力んで言っているのではない。キリストに引きつけられているんだ。キリストという天極に磁石みたいに引きつけられている。聖霊という磁性があるからね。どんなに揺れたって、キリストに向かわざるを得ない。

●十字架という徹底的な恩寵

あなた方ね、「聖霊」と言うと、何か特別なものだと思つたら、それは困るよ。自分が本当にキリストの十字架でぶつつぶれてごらんよ。もうここですつつぶれている。

「まだ、私は自分が無になれません」

なんて、何を言うか。キリストが無を賜っているじゃないですか、私無き世界を。無私という、私無き世界を賜っているのに、なぜ、「私はまだ無になれません」と言うか。それなら、「十字架をいい加減にしているのか」と私は言いたくなる。

「自分で無という悟りの世界に入ろう」

なんて、冗談じゃない。キリストで私たちは私の無い無私の世界に入れられたんだ。無私の世界に入れられたのが、十字架という徹底的な恩寵ではないですか。

相変わらず在るよ、「私」というものが。そんなものがあるから、いつまでも問題にしていたってダメだ。それだったら、十字架は要らないんです、私たちが自分の悟りでもって無私の世界に入れるなら。そんな相対的なプラスもマイナスも善悪の彼岸に来ている。

善悪の彼岸に来ているということ。ニーチェじゃないけれども、ニーチェの言っていることは、本当はキリストははつきりやっている。ニーチェは、そこは自分でやろうとしたってダメだよ、「ウィーバーメンシュ」(超人)なんて言つたって。本当の「ウィーバーメンシュ」「スーパーマン」はキリストなんです。その「スーパーマン」は自分を何ものともしなかったという話だ。これは絶対の逆理ですから。「絶対矛盾の自己同一」ということを西田さんが言つたけれども。

そういう無私の世界。自分がないんだ。そうしたら、自分の無い世界を、十字架を本当に受けとつたら、そこには聖霊が来ざるを得ないではないですか。神さまは真空にしておかないんだ。聖霊は来ざるを得ない。

「ああ、何か知らないけれども、力が来てしまいました」

と。それがもう聖霊の世界ですから。いいですか。「まだ、私は聖霊を受けてません」なんて、いつまでも言っている必要はない。何か現象だと思つている。現象は、今度はそこから起きてくる。いいですね。

どうも困つたものだな、一番やさしいことをみんな難しくしてしまっているから。この



私も長いことそうだった。無教会時代は、「聖霊」という言葉を聞いたって、聖霊があることを知らないんだ。けれども、内村先生も藤井先生も塚本先生も、私にこれだけ徹底的には言ってくれませんでした。だから、私は無教会を乗り越えたんです。それだけの角度で、私は『無者キリスト』(著作集第一巻、1975年刊)を書いたのに、無教会の人は読もうともしない。それではいつまでたってもダメだ。騙された^{だま}と思って読んでみたらいい。それだけ、要するにパリサイなんです。キリストが、

「お前たち、ダメだ。自分を義としている。自分の信仰を何かと思ったり、自分の行為を何かと思ったり、自分の愛を何かと思っているうちは、ダメだよ」と。もう言葉にならん。

●本願帰入一如

「義人は信仰によりて生く」

という言葉は、ハバクク書2章4節には、

「義人はわが信によつて活くる」

と書いてある。「わが信」と神さまが言っている。

「わが信によつて義人は活きる」

「私が本当の信である」

ということ。そこへいくと、もう信と義とは同じことになる。

「アブラハム、エホバを信ず」

という。アブラハムはエホバを信じた。

「エホバの神さまに然りと言った」

そうしたら、

「エホバはこれを彼の義となした」

と。「自分を否^{いな}として、神さまを然り^{しか}」としたらば、その事態を——相手をプラスにして自分をマイナスにしたならば、これが放電するように——それを「義とした」という。これをやっていたのがキリストなんだ。アブラハムの信仰を徹底的に本当にしたのがキリストだから、キリストのことを「アブラハムの子」と言っている。

神さまは私たちを徹底的に信じてくださっている、このダメなやつを。即ち、神さまの信とは同時に恩恵なんです。同時に義なんです。みんなこれは一つなっている。また、愛です。みんなこれは離すことはできない。単なる概念ではないですから。「信・恵・義・愛」これはみな一如の世界です。

神を義とする。神さまだけが義しい。これはパウロも言っている通り。キリストだけが信実である、信である。恵みを100%に受けることが信、信ずるということです。だから、恵信一如です。恵が先です。本願が先です。本願に帰入することが一如の世界です。本願



帰入、一如です。これが恵信一如なんだ。

そういうように、上からみんなやって来ている。信も恵も義も。それを「神の力」とパウロが言っている。与える力なんです。本当の天来の力、死んでも死なない力です。

そういうような、人に与え、人を救う力は何ですか。愛の力ではないですか。力ある愛ではないですか。ただ感情的な愛ではない。力を持っている愛なんです。相手を救い上げてしまう。

あなた方、病人や何かをそうやって少し救って上げてくださいよね。本当に使徒行伝のように、

「祈りて手を置けば即ち癒えん」

という。私みたいな者をおしても、相変わらずそういう力が働くからしょうがない。その恵みを受けながら、集会から出ていったりね。後はダメだよ、それは。恵みを受けて恵みの奥の世界に、現象を受けたら現象の奥の本体の世界に入らなかつたら、信仰はダメ。それだつたら、ご利益信仰になる。ご利益信仰でもって、キリストのまわりにいたのがみんなキリストに癒されたりしたけれども、本当にキリストを受けとつたのは使徒たちだけ。三、四人だけ。新約聖書に伝えられているあの三、四人。ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロなんてなご連中だ。「十二使徒」なんて言つたつて、大体四人位いだ。これが本ものに受けとつた。自在に現象した。けれども、そんなことは問題にしてない。いつも問題にしているのはキリストだけ。それが本当に、囚^{とら}われない自由の世界なんです。

まあ、こんなことは学校の教育では、とてもできないよ。だから、あなた方は、こういう塾に來ている。聖書塾に。本当の教育も、塾的でなければダメなんです。寺小屋精神、塾的精神が大事なんです。

16節、17節はそういうわけで、何とも言えないところです。そして、神の義が救である。預言者や詩篇あたりに、もうその火花が散っていた。それを本式に受けとつたのはキリストです。それで、パウロがさんざんキリストに反抗していたから、キリストがひっくり返してしまつた。

「分かつたか。神の力がわかつたか。恵みの力が分かつたか」

と、キリストは事実をもつてパウロを説き伏せてしまつた。「もう参りました(降参しました)！」というのが、私は「僕」だと言う。

「私は参りました。キリストに参つた男であります」

というのが、「私はキリストの僕」ということです。「キリストに参りました」と。ですから、皆さんはもう大丈夫。どんなことがあつても、力より力に行きます。

